

KANEKA

平成 2 0 年 3 月期
中間決算概要

株式会社 カネカ

1. 業績概要 (平成20年3月期 中間決算短信(連結) P. 1 参照)

(単位: 億円)

	18年 9月期	19年 9月期	前年同期比		当初予想 (中間期)
			増減額	伸び率	
売上高	2,326	2,512	+185	+8.0%	2,350
営業利益	178	182	+4	+2.1%	180
経常利益	185	181	4	2.3%	175
中間純利益	120	101	20	16.3%	100

売上高は前年同期に比して、+185億円、+8.0%の増収、営業利益は前年同期比+4億円、+2.1%と増益となったが、経常利益は4億円、2.3%、中間純利益は20億円、16.3%と減益となった。特別損失として減損損失6億円を計上している。(平成20年3月期 中間決算短信(連結) P. 11、P. 15 参照)

2. 事業セグメント別売上高・営業利益の状況

(平成20年3月期 中間決算短信(連結) P. 17、P. 18 参照)

(単位: 億円)

	売上高			営業利益		
	18年 9月期	19年 9月期	増減	18年 9月期	19年 9月期	増減
化成品	444	506	+62	20	26	+6
機能性樹脂	405	440	+35	67	69	+3
発泡樹脂製品	354	367	+13	4	1	+3
食品	538	572	+34	19	9	10
ライフサイエンス	209	175	33	35	23	12
エレクトロニクス	263	292	+28	54	45	9
合成繊維、その他	114	160	+46	12	35	+24
消去・全社費用	-	-	-	25	25	0
計	2,326	2,512	+185	178	182	+4

売上高はライフサイエンスのみが減収、それ以外の6セグメントは増収。営業利益では食品、ライフサイエンス、エレクトロニクスの3セグメントが減益であったが、化成品、機能性樹脂、発泡樹脂製品、合成繊維その他の4セグメントが増益。

為替はドル、ユーロともに円安となっており、前年同期と比較して売上高で+62億円、営業利益で+20億円の影響となった。原燃料価格高騰は

石化原料関連で 46 億円（受入ベース）の影響であり、販売価格修正や販売数量の増加でカバーできているが、食品事業関連の原材料高騰に関しては販売価格修正が追いついていない。

当中間期の事業セグメント別の状況は以下の通り。

- ・ 化成品：塩ビ系特殊樹脂はアジアでは堅調に推移したものの米国の住宅市場低迷の影響を受け、増収ながら減益。塩化ビニールは輸出が伸張、原燃料価格高騰の影響を吸収すべく販売価格修正にも注力。か性ソーダはタイトな需給により堅調に推移し、セグメント全体では増収増益。
- ・ 機能性樹脂：モディファイヤーは米国の住宅向け販売が不振。変成シリコーンポリマーは欧米を中心に販売数量が増加。原燃料価格高騰の影響はあるものの、増収増益。
- ・ 発泡樹脂製品：原燃料価格が高騰を続ける中、販売価格修正やコストダウンに取り組んだが、発泡スチレン樹脂、押出發泡ポリスチレンボードの収益回復は小幅。発泡ポリオレフィンコスト改善が実り、採算性が改善。セグメント全体では増収増益ながら、黒字には届かず。
- ・ 食品：差別化商品の拡販を図ると共に、販売価格修正にも注力し、増収。しかし、主力の製パン・製菓業界の市況が低調に推移した事に加え、原材料価格急騰の影響も大きく、採算は低下し、減益。
- ・ ライフサイエンス：医療機器は販売が順調に拡大し増収増益。医薬バルク・中間体は既存品、開発品ともに前年同期を下回り、機能性食品素材は競争が一段と激化し、採算が大幅に悪化。セグメント全体は減収減益となった。
- ・ エレクトロニクス：携帯電話、エレクトロニクス製品の需要が立ち上がり、超耐熱性ポリイミドフィルムは販売好調ながら競争激化による価格下落により増収ながら減益。太陽電池は欧州の需要が引き続き旺盛であり、好調に推移した。セグメント全体は増収ながら減益。
- ・ 合成繊維、その他：合成繊維は原燃料価格が高騰を続ける中、高付加価値品の生産、販売に注力するとともに、採算の改善を図るべく販売価格修正にも取り組んだ結果、増収増益。その他事業はほぼ前年同期並みの業績となり、トータルでは増収増益。

３．単独／連結子会社別売上高・営業利益の状況

(単位：億円)

	売 上 高			営業利益		
	18年9月期	19年9月期	差異	18年9月期	19年9月期	差異
単独	1,464	1,570	+ 106	130	132	+ 2
国内子会社	1,118	1,208	+ 90	27	23	5
海外子会社	497	545	+ 47	36	39	+ 2

国内子会社では医療機器の販売会社であるカネカメディックスが好調であるが、太陽油脂、カネカサンスパイス等の食品関連の子会社が低調。
海外子会社では米国の住宅市況の低迷の影響を受け、カネカテキサスが低調であるが、良好な欧州経済を背景にカネカベルギーが好調。

４．海外売上高の状況 (平成20年3月期 中間決算短信(連結) P.20 参照)

(単位：億円)

	18年9月期	19年9月期	増減額	伸び率	(参考) 19年3月期
アジア	332	404	+ 71	+ 21.5%	686
北米	217	195	21	9.8%	421
欧州	235	290	+ 55	+ 23.4%	501
その他	52	75	+ 22	+ 42.7%	110
海外売上高計 (海外売上高比率)	836 (35.9%)	963 (38.4%)	+ 127	+ 15.2%	1,718 (36.3%)

輸出、海外子会社の売上高ともに増加。機能性食品素材の低迷により北米向けの売上高は低調となったが、アジア、欧州、その他は着実に増加している。この結果、海外売上高は前年比+127億円増加、海外売上高比率は前年同期35.9%、前期36.3%に対して38.4%と大きく上昇した。

5 . 通期決算の見通し (平成20年3月期 中間決算短信(連結) P. 1、P. 5 参照)

(単位:億円)

	19年3月期		20年3月期		対前年(通期)		当初 予想 (通期)
	上期 実績	通期 実績	上期 実績	通期 予想	増減額	伸び率	
売上高	2,326	4,732	2,512	5,100	+368	+7.8%	4,900
営業利益	178	367	182	400	+33	+9.1%	400
経常利益	185	369	181	390	+21	+5.6%	390
当期(中間)純利益	120	184	101	225	+41	+22.5%	225

食品、ライフサイエンスは減益となる見込みであるが、それ以外のセグメントは増益の見込み。合成繊維が引き続き好調であり、エレクトロニクスは太陽電池などで業績拡大を見込む。

通期の連結業績は原燃料価格高騰に対応した販売価格修正を織り込み、売上高を200億円上方修正し、5,100億円とする一方、利益面は当初予想を据え置いた。

尚、平成19年下期の前提は

- ・ 為替: 115円/US\$、160円/EURO
- である。

以 上